

## 志賀の山越えの「いはえ」考

—「大和物語」一三七段—

\* 森 本 茂

## 一

「大和物語」(為家本)一三七段の本文は次のようである。

志賀の山越えのみちに、いはえといふ所に、故兵部卿の宮、家をおはかしようつくりたまうて、時々おはしましけり。いとしのびておはしまして、志賀にまうづる女どもを見たまふ時もありけり。おほかたもいとおもしろう、家もいとをかしようなむありける。として、志賀にまうでけるついでに、この家に来て、めぐりつつ見て、あはれがりめでなどして、かきつけたりける、

かりにのみくる君まつとふりいでつつなくしが山は秋ぞ悲しきとなむ書きつけていにける。

以下、「志賀の山越え」の「いはえ」について考察したいと思うが、まず志賀の山越えの道順を明らかにしておく必要がある。

## 二

志賀の山越えは、京白川から近江の志賀に至る道であるが、志賀の地域が南北に細長く、山道が何本かある上に、資料もとぼしいので、平安の頃の道順を特定するのは容易ではない。

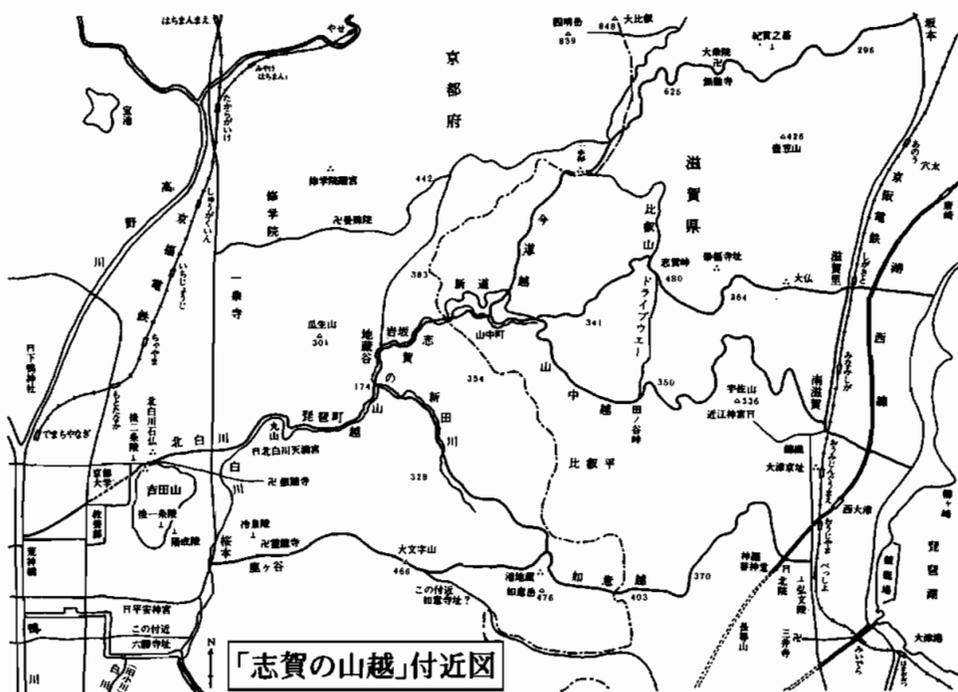
まず「志賀」の地域であるが、承平年間(九三一―三三七)に成立した「和名抄」の滋賀郡には、古市・真野・大友・錦部の四郷の名がみえる。古市郷は現大津市膳所・石山付近であり、真野郷は大津市真野町付近であり、大友郷は大津市坂本付近であり、錦部郷は大津市錦織・園城寺(三井寺)付近である。すると白川から山越えして行く志賀は、だいたい滋賀里から三井寺までの、南北二、三キロの地域と考えてよからう。

志賀の山越えの山城(京都)側の道順については、釈浄惠著「山城名跡巡行志」(宝暦四年―一七五四)に、

荒神口 名所 往古云「近衛河原」即此。此口より吉田、白川に通ず。古の街道の並木、古松、今所々に残れり。(巻一)

とある。藤田元春著「都市研究平安京変遷史附古地図集」所収の、無庵著「新版平安城東西南北町並落外図」(承応二年―一六五三)や、「増訂故実叢書」所収の、森幸安著「中昔京師地図」(宝暦三年―一七五三)、源重度著「中古京師内外地図」(天保七年―一八三六)にも、この道が記されている。荒神口の近くでは、荒神口の北で鴨川にそそぐ月輪川(旧田中村を流れる)に沿っているようだ。

すなわち、志賀の山越えは、現在の京都御所の東、鴨川にかかる荒



神橋を起点にし、荒神橋の東詰のすこし北から北東東へ向かい、東一条・北白川バス停（吉田山の北）をへて、旧道沿いに東へ向かい（銀閣寺方面へ向かうのは新道）、北白川天満宮の下から白川に沿って近江方面に至る道であり、現存する。ただし、東一条から北白川バス停の西南（吉田山の西北）までの約五〇〇メートルの区間は、京都大学の校地となり消滅している。

ただし、これらの古地図の古いものでも近世初期のものであり、この道が中世以前から存在したという確証はない。しかし、林屋辰三郎・川嶋将生・鎌田道隆編『京の道—歴史と民衆—』によれば、荒神口は中世には「今道の下口」あるいは「白川口」「坂本口」といわれて京の七口の一に数えられ、室町時代には禁裏内蔵寮の関所が置かれ、公家の山科家が関銭の徴収などに当たったというから、この道が中世以前からの古道であったとみてよからうと思う。

### 三

次に、白川から志賀に至る、おもに近江側の道順であるが、それについて具体的に書いたものとしては、顕昭が古い。すなわち、『袖中抄』（文治元年—一八五—頃か）に、

志賀の山越とは、北白河の滝のかたはらよりのぼりて、如意のみねごえに志賀へ出る道也。（巻十七）

とある。この北白河の滝について、寒川辰清著『近江国輿地志略』（享保十九年—一七三四—）は、「如意輪堂の楼門の滝是なり」（巻十三）とし、鹿ヶ谷から如意岳に登る途中にある楼門の滝（滝のそばにもと如意寺の楼門があった）をそれとみなし、鹿ヶ谷から如意岳をへて三井寺に至る如意越えを、志賀の山越えとする。（巻十三）しかし、顕昭は、北白川と一乗寺の間にある瓜生山（三〇—メートル

ル)について、

瓜生山とは、白川の滝の上也。(『袖中抄』卷十七)

とし、この白川の滝が北白河の滝のこととみられるから、北白川の滝は楼門の滝ではあるまい。

白川の滝は「能因歌枕」「五代集歌枕」「八雲御抄」にもみえる歌枕であった。白慧著「山州名跡志」(正徳元年―一七一―)に、

(白河)滝 今は亡し。古在<sub>リ</sub>里東五町許。北より南に落つる。二十年前猶在り。総じて此里民石を伐りて為<sub>レ</sub>業。此<sub>レ</sub>故に年々に掘<sub>テ</sub>穿<sub>テ</sub>て滝滅せり。水流今所々に分れ流る。其所今云<sub>フ</sub>滝溪<sub>ト</sub>也。(卷五)

とあり、瓜生山から白川に流れ落ちていたが、江戸中期に消滅したという。

ところが、「名跡志」から七十年ほど後に成立した、秋里籬島著「都名所図会」(安永九年―一七八〇―)の「北白川」の項に、

白川の滝は道の傍にありて日陰を晒し、川の半に橋ありて、はじめに右手に見し流れもいつとなく弓手になりて、谷の水音浙瀝として深山がくれの花を見……。 (卷三)

とある。ここに「川の半に橋ありて」は、新田川が白川にそそぐ所の橋(如意越えに向かう所の橋)で、現在もそこから下流は白川が道の右手を流れ、そこから上流は白川が道の弓手(左手)を流れている。するとこの白川の滝は、新田川が白川にそそぐ所から下流にあったことになる。

【名所図会】にいう白川の滝が、「名跡志」にいう消滅したはずの白川の滝なのか、あるいは、「拾芥抄」にいう七瀬の霊所の一の「東滝北白河ノ滝」、それは大島武好著「山城名勝志」(正徳元年―一七一―)に、

東滝 按今在<sub>リ</sub>山中越内白川村東与<sub>リ</sub>山中村之間<sub>ト</sub>。(卷十二)

とある、その東滝のことか、明らかでないが、要するに「袖中抄」の文は、白川から新田川に沿って登り、如意岳を越える道であるから、北白河の滝は新田川が白川にそそぐ所から下流の道のそばにあったはずであり、位置的に「名跡志」(「名所図会」)に記す白川の滝と一致する。

現在、白川に流れ落ちる自然の滝は見あたらないが、白川が滝となつて流れ落ちる箇所は、大小を含めていくつかある。すなわち、岩坂に一つ、地藏谷の北白川ラジウム温泉の下に二つ、琵琶町にも二、三みられる。そして現在一般に白川の滝というのは、昭和六十一年元旦の「京都新聞」朝刊の「別冊切抜帳」でも紹介された、岩坂の滝をさすようだ。それは大きく二段に分かれ、上流側が約一・五メートル、下流側が約四メートルの落差がある。

しかし、この滝は新田川が白川にそそぐ所から数百メートルも上流にあり、「袖中抄」の北白河の滝には該当しない。やはり「袖中抄」の北白河の滝は、前述の「名跡志」(「名所図会」)の白川の滝をさすと考えられる。「名跡志」によれば白川の滝のあった所を「滝溪」というそうであるが、地もとの郷土史家に尋ねても現在その位置は不明である。

結局「袖中抄」の志賀の山越えは、北白川から白川の滝のそばを通過して白川沿いに登り、途中から新田川沿いに登り、如意岳の北麓をへて柳川沿いに下り、皇子山・錦織に至る如意越え(最高三五〇メートル)のことである。

ところが、同じ顕昭が、「古今集」の、  
志賀の山越えに、女の多くあへりけるに、よみてつかはし  
ける  
貫之

梓弓春の山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける（巻二・一一五）

の志賀の山越えについて、『古今集註』に、

是は如意越よりは北、今路越よりは南に、志賀へ越ゆる路ありといへり。（巻二）

と記している。ここにいう「如意越」は、『袖中抄』の「如意のみねごえ」であろう。今道越えは、『太平記』に、

正月二十月の晩景に東坂本にぞ著きにける。官軍いよいよ勢を得て、翌日にもやがて京都へ寄せんと議しけるが、……新田左兵衛督兄弟は二万余騎の勢を率し、今道より向かって北白河に陣を取る。（巻十五・正月二十七日合戦事）

搦手には……四国、中国の勢八万余騎、今道越に三石の麓を経て、無動寺へ寄せんと志す。（巻十七・山攻事付日吉神託事）

とある道で、山中町の西教寺のそばの石橋から北へ向かい、一本杉・無動寺をへて上坂本に至る道である。

#### 四

如意越えの北、今道越えの南には、現在、山中越えと志賀峠越えの二本の道があり、顕昭が『古今集註』という道が、そのどちらなのか、明らかでない。顕昭が記していないので、他の資料にあたってみよう。

志賀山越、土人云、山中村の東端に石橋あり。それより東南へ行く道、志賀の山越也。南滋賀へ出る順路也。（『山城名勝志』

卷十二）

志賀山越、滋賀里赤塚より登り、峠を越え、山中里、白川村を経て京師に出づる、これを山中越といふ。（『東海道名所図会』卷一）

志賀山越 一名瓜生山。今、山中越と云ふは新道なり。東山勝軍地蔵へ出づる。（『近江名所図会』卷二）

志賀山 今滋賀村の山嶺なり。北比叡の脈を受け、南は長等、逢坂に連る。山路の西に踰えて白川（山城愛宕郡）に通ずるを志賀山越と称し、五十町計あり。又、三井寺の北院より登り、如意の北を繞る岐路あり。然れども本路は、大字滋賀里より登り、山中越と呼ぶ者は是なり。（『大日本地名辞書』近江滋賀郡）

「大日本地名辞書」の「又、三井寺の北院より登り、如意の北を繞る岐路あり」は「袖中抄」の如意越えにくらべて、新田川に沿う所は同じだが、如意岳の北から三七〇メートル地点をへて北院（神羅善神堂付近）へ下る道であり、その点が異なる。

「山路の西に踰えて、白川（山城愛宕郡）に通ずるを志賀山越と称し、五十町計あり」は、『山城名勝志』「近江名所図会」にいう道と同じで、山中町から東南へ向かい、田ノ谷峠（高さ三五〇メートル）を越えて南滋賀に至るもので、現在、山中越えといっている道である。また、「本路は、大字滋賀里より登り、山中越と呼ぶ者は是なり」は『東海道名所図会』にいう道と同じで、これも山中越えといたらしい。かくして二つの山中越えがあることになる。

「日本後紀」の弘仁六年（八一五）四月二十二日条に、嵯峨天皇の唐崎行幸の記事があり、そこに、

幸<sub>ニ</sub>近江ノ国滋賀ノ韓崎<sub>ニ</sub>。便<sub>テ</sub>過<sub>グ</sub>崇福寺<sub>ヲ</sub>。

とある。崇福寺址は滋賀里の西の谷にあり、現在の山中越えで行くならば、南滋賀に出てから滋賀里まで北上し、さらに西の谷に入ることになって迂回路となり、「過崇福寺」とはいえない。この行幸の道は、『東海道名所図会』にいう旧山中越えであり、現在の山中越えは『近江名所図会』にいうように新道であるようだ。

かくして、顕昭が『古今集註』に記した、貫之の通った志賀の山越えは、山中町の東端で旧道と新道が合流する所から、北東へ向かい、志賀峠（四八〇メートル、比叡山ドライブウェイが南北に走る）を横断し、崇福寺の金堂址の下をへて滋賀里（旧赤塚村を含む）に至る道で、旧山中越えをいうと考えられる。そこに「志賀へ越ゆる路ありといへり」と書いたのは、その旧山中越えが顕昭の当時あまり利用されずに荒廃し、顕昭もよく知らない古道であったからだろう。旧山中越えが衰退した理由については、上條彰次氏は崇福寺の衰退と関係があらうと述べておられる。

紀貫之は天慶八年（九四五）に没したといわれ（『和歌大辞典』）、元良親王は天慶六年（九四三）に没しており（『紹運録』など）、二人は同時代の人である。したがって、『大和物語』一三七段の志賀の山越えも、旧山中越えであったと推定される。現在、この旧山中越えは、牛車の通れるほどの道幅はあるが、地もとの人もあまり通行せず、志賀峠付近では、つた・かずらが道を塞いでいるとのことである。

## 五

さて問題の「いはえ」であるが、旧注では次のように記すだけで、近代の注釈もすべて未詳とする。

岩江 三井寺西也。（鈔）

いはえも其（志賀の山越）わたりなるべし。（冠註）

『鈔』のいう三井寺西は、如意越えの出口、長等山の麓であり、志賀の山越えを旧山中越えとする立場からはまったく問題にならない。ところで、為家本の「いはえ」は、為衆本・宮内庁書陵部本には「いは江」とあり、為氏本は「いはみ」、勝命本・御巫本・鈴鹿本は「いもはら」（『元良親王集』も）、寛喜本は「いはす」とある。す

なわち「いもはら」だけが独自異文であり、他は「いは」の二文字が共通する。旧山中越えの途中に「いはえ」という地名は見出だせない。そこで考えると、あるいは原本は「いはえ」でなく、「いは」のつく「いは〇」という地名であったのではないか。

『大和物語』一三七段によれば、元良親王は「いはえ」に山荘を造って、志賀寺（崇福寺）に詣ずる女房たちを御覧になったという。すると「いはえ」の位置は、京から旧山中越えの崇福寺までの間であり、崇福寺から琵琶湖の間ではありえない。旧山中越えは山中町から崇福寺までは、尾根道であったり、最高四八〇メートル級の山々を縫うように続いており、そんな山中にとても山荘を造るような環境にはない。「いはえ」は京から山中町までの山城（京都）側にあった地名と推定される。

そこで京都側から「いは〇」という地名を探すと、地蔵谷の奥、山中町の手前に「岩坂」という地名が現存する。次にその岩坂について調べてみる。

岩坂は旧愛宕郡白川村大字岩坂、現在は京都市左京区北白川岩坂町という。『角川日本地名大辞典』（京都府・下巻）によれば、岩坂町にはわずかに二世帯・八人が居住する。『同大辞典』に、

東は滋賀県大津市に隣接。比叡山の南山中に位置し、南部を主要地方道下鴨大津線が東西に通じ、白川が西に流れる。ほとんど針葉樹林（人工林）と広葉樹木とで覆われる地域。当町は風致地区に指定されている。

とある。『愛宕郡志』の「白川村」の項には、

白川山 白川越道路の南北に在り。……北を北山と云ふ。高約十八丈。西南面本村に属す。勝軍山、瓜生山、中山、南が原、岩阪、地蔵谷、蓬谷、清沢口、丸山、外山等の称あれど、皆白川

山の区分に過ぎず。

岩阪 東北 二七五、八二七（段別）

細別小字 蓬谷、岩阪、地藏谷、猪ノ鼻。

とある。すなわち、岩阪は志賀の山越えの京都側の端にあり、滋賀県大津市山中町と接し、北白川仕伏町から白川沿いに二キロほど入った谷間にある。現在の行政区画は、白川を境にして北を地藏谷・岩坂といい、南を中山・南が原というそうである。

岩坂のことは、管見に入った限りでは『平家物語』に一箇所登場する。すなわち、以仁王（高倉宮）は大津の三井寺にこもり、比叡山の延暦寺（山門）、奈良（南都）の興福寺の援助を期待しながら、平清盛討伐の計を練っていた。しかし、山門は頼りにならず、南都の援軍もおそく、しだいにあせり始めた。やがて、三井寺では大衆が集まって会議をし、搦手は如意越えをして白川の在家に火を放ち、六波羅の平家の武士をそちらへおびき寄せ、そのすきを見て大手が逢坂越えから一気に六波羅を攻めることにした。そこに次のようである。

老少二手にわかして、老僧どもは如意が筆より搦手にむかふべし。足がる共四五百人さきたて、白河の在家に火をかけてやきあげば、在京六波羅の武士、「あはや事いできたり」とて、はせむかはんずらん。其時、岩坂・桜本にひひかけひひかけ、しげばしささへてたかはんまに、大手は伊豆守を大將軍にて、悪僧共六波羅におしよせ、風うへに火かけ、一もみもうでせめん、などか太政大臣やきいだいてうたざるべき」とぞ僉議しける。（巻四・永僉議―大系本）

「ひひかけ」については、「おびきだす」（大系）、「襲いかかる」（全集）、「だます」（古典全書）、「馬を駆って襲う」（新潮集成）などの解がある。寂光院本には「ひかへ」とあり、それならば「控え

る」の意となる。これが『源平盛衰記』（黒川本）には、

在京に火を放ちなば、六波羅の早雄の武者共、軍兵に招かれて馳せ乗らば、引退き引退きあひしらひ、矢少々射させて、岩坂・桜本に引籠りて戦はん。（巻十四・三井寺僉議附浄見原天皇の事）のように、「引籠りて」とある。「ひひかけ」は『大日本国語辞典』に、「計略などで相手を陥れること。だますこと」とあるような意味で、ここは「だまして誘いこむ」の意味であろう。

当時の「白河の在家」の位置も問題になる。大島武好著『山城名勝志』（正徳元年―一七一―）に、

白河 古号ニル白川、地者、從ニ浄土寺村・北白川村、限ニ鴨河、東ニ、迄ニ九条、辺ニ、凡ニ曰フ白河也。（巻十三）

とあり、源重度の『中古京師内外地図』（天保七年―一八三六―）もほぼ同じ区域とし、白川の流れを境にして、北を北白川、南を南白川というとする。

一方、白川の流れについては、『京都市の地名』（日本歴史地名大系・27）の「白川」の項に、

かつての白川は三条通の北を西に流れて鴨川と合流していたが、承応二年（一六五三）の新改洛陽並洛外之図によると白川本流が廃絶しており、それに代わって白川の支流であった小川が、新たに白川として登場している。従って現在、平安神宮（現左京区）前の慶流橋から疎水と分れて南へ流れ、知恩院古門前（現東山区）を西に流れて四条通の北で鴨川運河に合流する川も白川とよぶが、これは昔の小川であり、かつての白川本流ではない。

とあり、平安の頃の白川は、三条通の北で鴨川にそそいでいたようだ。

白川の地には、院政期に北白川のうちの一条／＼四条（現在の市立動物園・平安神宮付近）に六勝寺が造営された。さらに前述の『京都市

の地名」の「白川村」の項によれば、

「鈴鹿家記」明徳二年（一三九一）十一月二十六日に、白川・浄土寺の人々が吉田社神人と闘うとあり、この頃既に集落は成立していたようだ。

という。万治版「新版平安城東西南北町並洛外之図」（藤田氏の前書所収）や、寛文十一年（一六七二）の「新版平安城并洛外之図」にも、浄土寺村の北、現在の北白川天満宮の辺にのみ人家を記し、「白川むら」と書いてある。

藤岡謙二郎・西村睦男著「北白川と嵯峨野」に収められた、北白川の宅地の「年代別膨張図」を見ると、北白川の集落は明治十九年には、志賀の山越え沿いの北白川バス停（吉田山の北）から北白川天満宮へへて仕伏町まで発達している様がよく分かる。この地域は、縄文各期の遺跡群をふくむ北白川遺跡（北白川扇状地）の南辺に沿っており、古くから住居に適した所であった。平安当時の白川の集落も、如意岳の麓、とくに志賀の山越え沿いに形成されていたと推定される。その白川の在家に火を放って、平家を岩坂・桜本に誘いこもうとしたわけである。

## 六

桜本は、「栄花物語」で高内侍貴子（定子中宮の母）が没した所に、桜を（「を」は「本」の草体の誤）と云所にてぞ、さるべき屋作りて納め奉りける。（巻五・浦々の別れ）

とある。また、冷泉天皇は寛弘八年（一〇一一）十月に崩御し、「桜本寺乾原」に葬られた（帝王編年記）。北塚がその桜本寺址とされ、明治二十二年冷泉天皇陵（桜本陵）に治定された。その御陵は左京区鹿ヶ谷法然院町の靈鑑寺の西北にある。また、後一条天皇は長元九年

（一〇三六）四月に崩御し、御女の二条院によって御影が「菩提樹院」に安置された（帝王編年記）。その菩提樹院の位置であるが、後一条天皇の母上東門院（彰子）に関して、「百鍊抄」に、

長暦元年六月二日。上東門院供養菩提樹院。後一条院御墓所。号<sub>二</sub>桜下<sub>一</sub>。（巻四）

とあるのが参考になる。すなわち、菩提樹院陵のある地も「桜下」である。菩提樹院陵は古くは在原業平塚と称していたもので、明治二十二年後一条天皇陵に治定された。その御陵は左京区吉田神楽岡町の吉田山の東南にある。

以上によれば、桜本は吉田山の東、桜谷川の流れる鹿ヶ谷付近であり、三井寺から如意越えで鹿ヶ谷に出る、その坂の出口付近ということになる。如意岳には三井寺の別院の如意寺があった。その如意寺址は、楼門の滝の東百メートル余の平坦地がそれかといわれる。

「平家物語」（巻四）で鹿ヶ谷に下る如意越えは、三井寺の裏から登り、如意岳（四七四メートル）頂上のすぐ北側にある池地蔵をへて大文字山（四六六メートル）の頂上に至り、鹿ヶ谷に下る道である。次に、「平家」の岩坂については、

近江から都に入る通路にある地名だろうが、岩坂は未詳。（大系）

如意岳のうちで、近江路の一険である。いま不明。（富倉徳次郎著「平家物語全注釈」上）

如意岳より北の志賀越え途中の坂。（新潮集成）

岩坂は如意岳の中にて近江路の一険ならん、今其所を失ふ。（大日本地名辞書）

京都市左京区如意岳中の道。近江より京都に至る道といわれる。

（日本国語大辞典）

などとなり、大部分は未詳とする。

ただ、「新潮集成」だけは、現北白川岩坂町付近の坂とみている。しかし、同書の上巻・三一五ページの略図によれば、白河を吉田山の南とし、岩坂に行くのに、三井寺の北院から北へ向かい、現在の山中越えを通ったとする。もしそうだとすれば、「平家」本文の「如意が峯より搦手にむかふべし」とは合わなくなる。

岩坂は「新潮集成」のいうように、志賀の山越えの岩坂であろう。しかし、そこに至るコースが問題である。三井寺から如意越えをして桜本に出て、北白川の焼ける在家の中をくぐり抜けて、志賀の山越えの入口の岩坂に行くのも不可能だし、不自然である。

じつは岩坂へ行くのに老僧たちは、前述の「袖中抄」の如意越えを通ったのである。すなわち、如意岳の北の、池地蔵の北で道が迂回する所から新田川沿いに下り、志賀の山越えの地蔵谷・岩坂に行ったのである。この道は「太平記」にも現れる。すなわち、近江の坂本で顕家と義貞らが評定し、三井寺を襲うのに、大手は志賀・唐崎から攻め、搦手は、

山門の大衆は、二万余人、大略徒立なりければ、如意越を搦手に廻り、時の声を揚げば同時に落し合せんと、鳴りを静めて待ち明かす。(巻十五・三井寺合戦并当寺撞鐘事付依藤太事)

とある。すなわち、山門の大衆は延暦寺から今道越えで山中町へ下り、岩坂・地蔵谷をへて新田川沿いに如意岳に登り、三井寺を攻めたのである。

そこで、「平家」のばあいは、老僧たちは三井寺から如意岳の頂上の北に至り、そこから二隊に分かれて、一隊は志賀の山越え入口の岩坂に下って平家を誘いこみ、一隊は如意岳・大文字山をへて桜本に下り、平家を誘いこもうとしたのである。

現在は琵琶町の奥に地蔵谷、さらにその奥に岩坂があるが、元来、志賀の山越えの道は岩の多い坂道であり、白川石の産地にもなっている所だから、中世以前の岩坂は、志賀の山越えの京都側、すなわち、現在の琵琶町・地蔵谷・岩坂などを含めた総称であつたろう。

『大和物語』一三七段の「いはえ」は、「いは阪」(「いは坂」)の「阪」(坂)の草体が「江」の草体に似ている所から、「いは阪」(「いは坂」)が「いは江」と誤写され、それが仮名書きして「いはえ」になったと推定される。為衆本・宮内庁書陵部本に「いは江」とあるのは、転写の過程を推測させる写本として注目される。

現在の北白川岩坂町は、北白川仕伏町から白川沿いに二キロほど遡った所にあり、南北に山が迫り、道も曲折が多く、細長い谷間であり、平安の頃に親王の山荘を造るような地形や環境にはない。それに対して、平安の頃の岩坂を琵琶町付近までの総称とすれば、琵琶町の西の丸山(一四八メートル)の周辺が志賀越えの入口にあたり、谷間も広く、人里からもさほど離れていず、親王の閑静な山荘を営む地としては、格好の所だったと考えられる。

#### 注

- (1) 上條彰次氏「志賀の山越え」考—俊成歌観への一つのアプローチ—  
(『国語国文』昭和四十三年十月号)。  
(2) 『山城名勝志』巻十三、竹村俊則著「昭和京都名所図会」2など。

#### 後記

本稿は、昭和六十三年度、日本文学風土学会総会の公開講演会において話した内容に補筆したものである。

---

**On *iwae* : a spot on the mountain route to *Shiga*  
— *Yamato Monogatari*, Section 137 —**

Shigeru MORIMOTO